

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：教育学科

資格：教授

氏名：小島 明子

研究分野	研究内容のキーワード
日本古典文学	中古文学、中世文学、歴史物語、作り物語、仮名日記
学位	最終学歴
博士（文学）、文学修士、文学士	京都大学大学院 文学研究科 国語学国文学専攻 博士後期課程 研究指導認定退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 前任校・鳴門教育大学における「国文学特論Ⅱ」（学部3年生対象）の授業	2011年4月～2020年3月	「演習」形式の中で発表者以外の受講生の意見を聞く発問を発表者に用意させ、問いかけをなすことで、受講者全員の理解を深める効果を挙げ、かつ教育現場において児童・生徒に対して発問を行う能力を高めることに繋がった。
2. 前任校・鳴門教育大学における「国文学Ⅱ」（学部2年生対象）の授業	2011年4月～2020年3月	古典文法や古典単語の暗記ではなく、古典文学のおもしろさ、描かれる世界の豊かさに学生が気づくことができるよう、心情理解・作者の意図などを読み解く小テストを毎回実施、さらにその日のテーマを自分なりにまとめさせることで書く力の習熟も促した。

2 作成した教科書、教材		
1. 教科内容学に基づく小学校専門科目テキスト 国語	2016年3月	小学校の教員を目指す学生が、国語科で扱う内容を「教科内容学」として捉え、その構成原理・体系を学ぶためのテキスト。国語科学習指導の基本的な概念の把握から、言語事項・近代文学・説明文・古典文学の各分野の学習指導について、その意義・課題を浮き彫りにし、かつ教材分析の方法を提示、最後に国語科学習内容の構造化をなし、その体系性を認識させるという構成をとる。（総頁数：125頁） 〔執筆章〕第5章「古典文学の学習指導」第2節「国文学（古典文学）の立場から和歌・俳句を読む」pp.96-109 〔編者〕鳴門教育大学教科内容学研究会 〔執筆者〕村井万里子、茂木俊伸、黒田俊太郎、幾田伸司、小島明子 〔出版社〕徳島県教育印刷株式会社

3 実務の経験を有する者についての特記事項		

4 その他		
1. 平成29年度 小学校教員資格認定試験（国語）問題作成委員	2017年4月～2017年10月	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要

1 資格、免許		
1. 高等学校教諭専修免許（国語）	1990年3月31日～現在	京都府教育委員会：平成元高専第182号
2. 中学校教諭1級普通免許（国語）	1988年4月15日～現在	京都府教育委員会：昭和63中1第2号
3. 高等学校教諭2級普通免許（国語）	1988年4月15日～現在	京都府教育委員会：昭和63高1第2号

2 特許等		

3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 兵庫県・徳島県共催「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会 専門委員	2015年8月～2017年3月	「鳴門の渦潮」世界遺産登録に向けた学術調査検討委員会による研究報告集『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書—文化編—』（共著・2017年3月刊行）のpp.349-369を執筆。「鳴門の渦潮」の古典文学の中の位相を調査・検討し、論考となした。

4 その他		
1. 松茂町図書館主催 大学連携図書館講座 「『建礼門院右京大夫集』を読む—源平争乱時代の女流歌人の生涯—」講師	2019年6月	鳴門教育大学と松茂町図書館講座との連携講座。単発講座で、『建礼門院右京大夫集』を『平家物語』と対比しながら、その虚構性や歌の魅力、執筆意図について解説した。
2. 松茂町図書館主催 大学連携図書館講座 「『枕草子』の執筆意図—虚構と真実—」講師	2017年9月	鳴門教育大学と松茂町図書館講座との連携講座。単発講座で、『枕草子』をもとにしたプリントによって、その虚構性や作者・清少納言の執筆意図について解説した。
3. 松茂町立図書館主催 大学連携図書館講座 「『紫式部日記』を読む —『源氏物語』作者の素顔—」講師	2016年9月	鳴門教育大学と松茂町図書館講座との連携講座。単発講座で、『紫式部日記』をもとにしたプリントによって、紫式部の宮仕えへの姿勢、『源氏物語』創作との関わりについて解説した。
4. 川崎医療福祉大学主催 公開教養講座 「『建礼門院右京大夫集』を読む—源平争乱時代の女流歌人の生涯—」講師	2008年5月～2008年7月	隔週4回連続講座。教材に『建礼門院右京大夫集』をも

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
院右京大夫集』を読む」講師		とにしたプリントを用意し、歴史的背景について『平家物語』などを合わせて学びつつ、建礼門院右京大夫の歌と詞書を味読した。
5. 川崎医療福祉大学主催 公開教養講座「蜻蛉日記を読む」講師	2006年9月～2006年11月	隔週5回連続講座。教材に毎回プリントを用意し、『蜻蛉日記』を講読・解説。
6. 川崎医療福祉大学主催 公開教養講座「和泉式部日記を読む」講師	2005年9月～2005年11月	隔週5回連続講座。教材に毎回プリントを用意し、『和泉式部日記』を講読・解説。
7. 伊丹市立中央公民館主催 伊丹市生涯大学講座「増鏡」講師	2001年4月～2001年9月	隔週15回連続講座。うち14回は『ますかがみ』（佐藤敏彦編、おうふう）をテキストに講読・解説。また最終回は、作品の舞台の一つ宇治への日帰り文学踏査を行う。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 王朝歴史物語史の構想と展望	共	2015年3月	新典社	『栄花物語』に始まり『大鏡』『今鏡』以下の鏡物へと連なる平安時代の歴史物語群を、相互の連関と他ジャンルとの交響の相のもとに捉え、仮名文の歴史叙述の内実と有機的な展開の相を剔出する著作である。Ⅰ「王朝歴史物語を拓く」は研究の大きな枠組みを提示、Ⅱ「王朝歴史物語の表現世界」では各作品の特質に多彩な視点から切り込む。Ⅲ「王朝歴史物語をめぐる文学史」では他分野との相互関係を検討、Ⅳ「王朝歴史物語史への視座」では隣接諸学から新たな研究視点を示す。（総頁数:702頁） 【執筆章】「『今鏡』後三条紀の叙述意識」pp. 339-356 【執筆著者】福長進、加藤静子、小島明子 他27名
2. 中世宮廷物語文学の研究—歴史との往還—	単	2010年9月	和泉書院	中世の歴史物語と作り物語を「中世宮廷の物語」として総合的に捉え、皇室・公家の立ち位置から、時代を語る営為を読み解く。まずは、歴史物語の意図的な物語化の手法を分析し、作品の主題・執筆意図を解明する。一方、作り物語である中世王朝物語もまた、政治的動向・社会的背景・宗教的基盤などと密接に関わって成立し、それが登場人物の造型や主題の剔出に繋がることを示す。従来の細分化された枠組みを越え、物語の新たな研究世界を切り拓く試みである。（総頁数:358頁）
3. 説話論集 第17集	共	2008年5月	清文堂出版	「説話と旅」というテーマのもと「旅」から喚起されるイメージを各執筆著者が展開し、時代とジャンルを越えた論考を一書に編集する。第1部として王朝の物語や和歌に関わる4篇、第2部として個別の人物に絞った4篇、第3部として中世の軍記に関わる4篇、最後に第4部として通史的なものから近現代までの4篇を配して、日本文学史を縦断した「旅」の世界を複合的な視点から闡明する。（総頁数:592頁） 【執筆章】「『夜の寝覚』末尾欠巻部の推定—寝覚上の旅の終焉—」pp. 47-76 【執筆著者】荒木浩、小島明子、安達敏子 他13名
4. 中世王朝物語の新研究—物語の変容を考える—	共	2007年10月	新典社	『源氏物語』『狭衣物語』の圧倒的な影響下に、平安後期から室町時代にかけて作られた多数の物語群「中世王朝物語」について、その二つの物語を相対化し、さらに物語史の新たな展望を切り結ぼうとする論考を集める。文学史のみならず、美術史・宗教史・芸能史などより広い文化史を視野に入れ、従来の枠組みを越え、豊かな王朝物語史を構想しようとするものである。（総頁数:440頁） 【執筆章】「『我身にたどる姫君』の女帝像—女性往生者の投影—」pp. 168-195 【執筆著者】西本寮子、横溝博、小島明子 他11名
5. 国文学研究資料館データベース古典コレクション 歴史物語CD-ROM	共	2003年3月	岩波書店	国文学研究資料館所蔵の無刊記本を底本とし、そこに異なる系統の本文を対校本とし加え、データベース化したもので、データ作成にあたった各作品の編集協力者は著者相当と見なされる。歴史物語の『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』の五つの作品が、単語・文節など複数の方法で自在にクロス検索ができる利点のみならず、利用者自身が個別のデータを合わせ組み込むシステムも備わるデータベースとなっている。 【執筆章】共同研究につき、本人担当分の抽出不可能。CD-ROMにつき頁なし。 【執筆著者】『増鏡』は小島明子、福田景道、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』については他9名
6. 軍記物語の窓 第2集	共	2002年12月	和泉書院	関西軍記物語研究会に所属する研究者による論考を編んだ著である。当該の研究会自身が、軍記物語を基軸に据えつつも、歴史物語、作り物語、紀行、史論など多岐な文学ジャンルを包含し、かつ時代をも

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
7. 歴史物語講座 第6巻 増鏡	共	1997年11月	風間書房	<p>跨いだ多彩な研究をめざすもので、それを体現した研究成果を集積する。学際的・分野横断的なテーマ設定と、文学的資料・歴史分野の史料・宗教的資料などを基にした実証的な手法で、斯界の研究を先導する論を提示している。(総頁数:420頁)</p> <p>〔執筆章〕「『我身にたどる姫君』の藤壺皇后像」 p. 291-311</p> <p>〔執筆著〕 武久堅、櫻井陽子、小島明子 他18名</p> <p>歴史物語講座は全7巻で構成され、第1巻は総論編、第7巻は時代と文化編、第2巻～6巻の各巻において『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』を取り上げる。歴史・文学・文化史など多面的な視点から、歴史物語研究の創成期から現時点までの研究の総括をなそうとする試みである。第6巻は、鎌倉期の宮廷を中心に、滅びゆく王朝文化を物語的に活写しようとする『増鏡』について、研究史を体系的に捉えた上で、さらなる課題を提示し、研究の地平を広げようとする。(総頁数:277頁)</p> <p>〔執筆章〕 各論3「増鏡の人間像—第一部を中心に—」 pp.125-144</p> <p>〔執筆著〕 木藤才蔵、井上宗雄、小島明子 他10名</p>
2 学位論文				
1. 『増鏡』とその文学基盤	単	1997年3月	京都大学	<p>博士論文</p> <p>『増鏡』の原態説が提示された十九巻本の特有記事は十七巻本記事とは齟齬が多く、十七巻本こそが原態であることを内部徴証より検証(第1章)、また先例描写の意味を検討し(第2章)、従来言われていなかった中世王朝物語の影響をも読み取る(第3章)。さらにこの両者が『増鏡』作者の立場を推測する手がかりとなることを示してゆく。さらに先行の歴史物語の撰取と変容の相を考察し(第4章)。加えて『増鏡』第3部の同時代を描く女流日記『竹むきが記』をその文学背景として検討(第5章)、中世仮名日記との影響関係を論じた(第6章)。</p>
2. 金春禅鳳の作能法	単	1990年3月	京都大学	<p>修士論文</p> <p>室町後期の能楽作者・金春禅鳳の手になる能の曲「嵐山」「一角仙人」「生田敦盛」「東方朔」「初雪」「黒川」の作能法を析出する。登場人物の典拠との差異化、典拠の一部のみを焦点化する方法、従来から曲の主眼とされた「歌舞」のうち「舞」を重視する姿勢を指摘した。さらに「護法型」という古い能楽の要素を取り込むこともその特徴であり、「世阿弥的な能作」からの逸脱の要素が強いことを明らかにした。</p>
3 学術論文				
1. 『栄花物語』における中関白家—書かれること、書かれないこと—	単	2020年3月	鳴門教育大学研究紀要(人文科学編) 35巻 pp.198-208	<p>藤原道長に敗れた中関白家の人々(藤原定子・伊周・隆家、および定子所生の皇子女)の描写を抽出・分析し、その叙述に見られる特徴を明らかにするものである。さらに『栄花物語』では、この一家に関して書かれるのが当然と思われる記事が欠落している場合もあり、その意図にも検討を加える。中関白家について「書かれること」と「書かれないこと」の双方を考察することによって、『栄花物語』の歴史叙述の方向性の一つを浮かび上がらせる試みである。</p>
2. 『栄花物語』の叙述方法—道長政権成立までの道筋—	単	2019年3月	鳴門教育大学研究紀要(人文科学編) 34巻 pp.142-152	<p>道長の祖である九条流の人物の動向から道長が政権を握るまでを描く巻1～巻4の歴史叙述の方法を検討し、一族の同世代の多数から、3人の重要人物を取り出し対比的に描く手法、歴史的な事実の細かな年次の入れ替えをなすことで特定の人物像を強調する方法、政権を担うに価する人物には、その直系専属の意思の尊重や「孝心」が求められ、その条件を満たさない人物は淘汰されてゆくという史観に基づく描写方法を指摘した。『栄花物語』全巻の歴史叙述を解明する重要な切り口の提示となっている。</p>
3. 小・中学校における古典の授業展開力の養成	単	2018年2月	鳴門教育大学研究紀要(教育科学編) 33巻 pp.107-118	<p>「新学習指導要領」(2008年告示)によって、小学校でも古典教育が導入され、数年が経過したが、現在、小・中学校の教員をめざす大学生たちの古典への興味・関心、およびその読解能力は高いとは言えない。本稿は、こうした学生たちに、小・中学校の教育現場において授業を展開する力をいかに習得させるべきかという課題について考察する。特に和歌・随筆・物語の三分野について、鳴門教育大学での授業実践例を示しつつ、古典作品とその背景への広い知識、確かな解釈力、そしてそれを的確に説明する力の必要性を指摘し、その養成方法を提案する。</p>
4. 教科専門と教科内容の架橋を図る国語科教師教育の実践—「教科内	共	2017年8月	語文と教育(鳴門教育大学国語教育学会)	<p>専門的知見と教科の学習内容を架橋する大学院の授業科目「教科内容構成(国語科)」の実際を報告</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
容構成（国語科）」を通して—			第31号 pp. 28-47	した。同科目は、国語科授業作りの基本的考え方を学ぶとともに、教材研究のための知識と基礎的方法、及びそれを用いて教材を分析し、授業を構想する力の習得することを目的として実施している。本稿では、各回の具体的内容を受講者の反応や受容のあり方もふまえて記述した。 〔執筆章〕3.5「古典文学の学習指導」pp. 39-41 〔執筆章〕幾田伸司・村井万里子・田中大輝・黒田俊太郎・小島明子・原卓志・余郷裕次
5. 『更級日記』と『栄花物語』	単	2017年8月	語文と教育（鳴門教育 大学国語教育学会） 31号 pp. 21-31	近年の『更級日記』研究は、日記の記事が孝標女の体験や思考の直接の反映ではなく、文学的作為の結実であるという前提の上に、精査がなされる段階であり、本稿はその流れの中で『更級日記』と『栄花物語』との相互関係について検討する。『更級日記』に『栄花物語』の記事が撰取されるのは、治安元年（1021）からの短期間ながら、『栄花物語』が描く皇族や撰家家の歴史に、自らの生活も接点を有したことを書き留める意義を指摘し、『更級日記』が頼通の文化圏に育まれた文学作品であることを、従前以上に明らかにした。
6. 『栄花物語』富岡本の改修方向（査読付）	単	2016年8月	国語国文（京都大学文学部国語学国文学研究室） 85巻4号 pp. 15-35	『栄花物語』富岡本三十巻全体についての改修方針として、まずは歴史物語らしい依拠資料の尊重・年次考証の重視という叙述における基本的傾向を明らかにした。加えて、道長子女の網羅的列挙をなす増補、逆に道長子女を際立たせるべくなされた道長と疎遠な人物の描写の削除および人物の行動の改変という方向を新たに見出すことができた。改修によって自身の歴史観に叶った正編を作り出そうとした富岡本は、固定された本文の受容にのみ留まらない、歴史物語の再創造とも言える文学的営為として捉えるべきであると結論づけた。
7. 小学校国語教科書におけるNIEカリキュラムの開発	共	2015年6月	鳴門教育大学授業実践（鳴門教育大学学校教育学部・大学院学校教育研究科教務委員会） 14号 pp. 43-50	新聞界と教育界が連携し、新聞を活用した教育の推進であるNIE（Newspaper In Education）を小学校段階の国語科学習において、如何に系統化してゆかかを検討する。新聞固有の要素の抽出・現場における従前の新聞学習の分析を行った上で、カリキュラム試案を提示する。またその試案を踏まえて、小学校1・4・6年生を対象に行った授業実践の概要を報告するものである。 共同研究・共同執筆につき、本人担当分の抽出不可能。 〔執筆章〕幾田伸司、小島明子、村井万里子、他6名
8. 『栄花物語』富岡本増補記事の検討—巻二十七～三十に着目して—（査読付）	単	2014年6月	日本文学（日本文学協会） 63巻6号 pp. 11-21	『栄花物語』「異本系統」の富岡本において、顕著な増補がなされる巻二十七～三十を分析すると、増補されるのは藤原道長・頼通に関する記載であり、道長の後継者として頼通が殊に称揚される記載と、道長・頼通が東宮（のちの後朱雀天皇）に入侍する禎子内親王を懇切に後見する記載が強調される叙述傾向があることを指摘する。これらから、富岡本の改修時期は、禎子の産んだ後三条天皇の御世、東宮貞仁親王に撰家嫡流が娘を入侍させた延久三年（1071）以降とみなすことの妥当性を提示した。
9. 小学校国語教科書における「言語活動力」カリキュラムの検討—光村出版・6年（平成23年度版）『創造』の場合—	共	2013年5月	鳴門教育大学授業実践（鳴門教育大学学校教育学部・大学院学校教育研究科教務委員会） 12号 p. 45-53	光村出版教科書の小学校6年生3学期後半におかれた「今、わたしは、ぼくは」の単元でスピーチをするための「言語活動力」を、そこまでの学習段階でいかに習得するかを検討する。6年生の教科書から「取材・選材力」「構成・記述力」「音読・発表力」の三つをどの教材で学習させるかを領域横断的に可視化し、教科書のカリキュラムをより生産的に用いる方法を示した。 共同研究・共同執筆につき、本人担当分の抽出不可能。 〔執筆章〕幾田伸司、小島明子、茂木俊伸、他9名
10. 延慶本『平家物語』三院崩御記事の位置づけ	単	2012年8月	語文と教育（鳴門教育大学国語教育学会） 26号 pp. 16-26	延慶本『平家物語』第一本の三院崩御記事において、建春門院に関わる未詳箇所新たな読みを示し、平重盛と同様の人物造型がなされることを指摘、かつ両者の死は鹿ヶ谷の謀議と治承三年のクーデターを各々誘発する相似性を提示し、物語の意図的な叙述を読み解く。他二院も含めると、三者の死は後白河院の王権強化をもたらすもので、一連の記事は平家の悪行の起点であり、後白河院の専横の始発点でもあるという重層的な構図を明らかにする。
11. 『今鏡』〈すべらぎ〉の叙述意識—母后への注視から—（査読付）	単	2009年8月	国語国文（京都大学文学部国語学国文学研究室） 78巻8号 pp. 1-20	『今鏡』の帝紀は天皇母后に注視する姿勢が顕著で、特に最末尾は高倉天皇とその母后の家である平氏を祝すと見られてきた。だが『今鏡』の物語現在の嘉応二年の清盛と後白河院の政治的関係の微妙さ、武士である清盛に抱く作者の思いを史実を参照しつつ考察することで、『今鏡』があえて繁栄を寿ぐ描

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12. 危機の時代における中世王朝物語—『我身にたどる姫君』の善政描写をめぐる— (査読付)	単	2006年7月	日本文学 (日本文学協会) 55巻7号 pp. 12-21	写をなした点を読み解く。皇室と公家社会の変貌の中で、失われつつある文化的な営みを書き残すことが著述意図であることを指摘する。
13. 九条家と『我身にたどる姫君』—物語成立の環境をめぐる— (査読付)	単	2006年12月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 75巻12号 pp. 19-39	『我身にたどる姫君』の善政描写のさまは、史実における施策と符合して同時代性が強いことが指摘でき、作者圏が絞られることを示す。その上、九条道家の政治的位置、思想、同時代の皇室の状況や文化的な営みなどを検証すると、物語成立期が彼の全盛期に重なる可能性を論究する。従前、『風葉和歌集』の前後という括りしかできなかった中世王朝物語の成立時期の推定状況に風穴を開け、他作品にも敷衍できる手法を提示する。
14. 女院文化圏と『我身にたどる姫君』—前斎宮の問題を中心に— (査読付)	単	2005年12月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 74巻12号 pp. 15-35	『源氏物語』『狭衣物語』の模倣箇所のみが言及されてきた中世王朝物語の中で『我身にたどる姫君』は特異な描写が多く、殊に女帝と前斎宮には中世女流日記『たまきはる』の女院描写の摂取が顕著であることを指摘する。さらに他の同時代資料の検討の結果、この二人には院政期の複数の女院像が融合して投影される状況が窺え、作品が歴史的背景・政治的動向・社会的基盤などの側面において、女院文化圏を背景に形成されていることを示した。
15. 『我身にたどる姫君』皇后宮の女系考—一品宮の問題を軸に— (査読付)	単	2004年11月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 73巻11号 pp. 34-55	『我身にたどる姫君』で皇后宮の血脈に繋がる女系の人物達が、その美貌の相似と、密通に直面する宿命という共通項を有し、「肉親であっても結び合えない心に苦しむ」というテーマを一貫して担うことを提示。さらに、悲恋帝との密通の後、死を選ぶ一品宮の設定に類似する史実が、まさに『風葉和歌集』の時代に見出せることを新たに指摘し、それによって本物語前半部のみが『風葉和歌集』に採歌される事情が合理的に説明できることを検証する。
16. 『浅茅が露』散逸部の推定 (査読付)	単	2001年7月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 70巻7号 pp. 1-19	終末部が散逸しているものの、欠損部に関する情報が『風葉和歌集』から得られる中世王朝物語『浅茅が露』は、その散逸部が通説で言われる「はかなげな女が帝の寵愛を得る」という形ではないことを検証。また、二人の男主人公の人物像を、現存部の記述と他の同時代作品からの傍証を合わせて明らかにする。さらに物語の主題も、男主人公のみの悲恋遁世ではなく、登場人物の多くが各々の人生の中で出家得道の道を見出すものと位置づける。
17. 『増鏡』十九巻本原態説の検討 (査読付)	単	1996年4月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 65巻4号 pp. 248-267	『増鏡』は十七巻本が古本と見なされていたが、十九巻本 (増補本) が原態であるという説も出現する。しかし、この説が裏付けとする、ある記事と他の記事の「呼応」については矛盾が散見し、かつ十七巻本記事も十九巻本特有の記事も、それぞれの内部でのみ「呼応」があることを指摘する。加えて、単語の用法の比較、連歌的な特徴の分析の二点から先の指摘を補強。これは『増鏡』の文体と連歌との関わりの研究の進展に繋がるものでもある。
18. 歴史物語の継承—『今鏡』と『増鏡』の間— (査読付)	単	1995年7月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 64巻7号 pp. 1-19	従前は論がない『今鏡』と『増鏡』の継承関係について先例を軸に考察。『今鏡』の先例は末世の「今」にあつて、「昔」に恥じぬ事柄が出現したか否かそれを評価する基準とされるが、『増鏡』は吉例の先例を祖上にしつつ、その暗い面も記すことで先例を上回る幸いが「今」にあることを描き、姿勢に相違がある。ただ先例は、『大鏡』『栄華』から『今鏡』に一度摂取されたものが『増鏡』に継承される場合が多く、両者の関係の密接さを推定し得た。
19. 『増鏡』と擬古物語—恋愛情事記事に関して— (査読付)	単	1994年1月	日本文学 (日本文学協会) 43巻1号 pp. 48-56	『増鏡』には恋愛・情事の記事が多く、そこでは『源氏物語』の影響のみが考えられる傾向にあった。だが『増鏡』の兄妹の近親相姦の恋には『狭衣物語』『宇津保物語』や中世王朝物語『下燃物語』の影響があり、また皇女の私通・後宮の密通にも多数の中世王朝物語の表現が反映されることを指摘する。しかも如上の私通は亀山院・後宇多院・後醍醐天皇の大覚寺統の三代に集中していて、その血脈の濁りを示す作者の叙述意図が窺われることを論ずる。
20. 『増鏡』の先例の意味—「明暗循環」説との関連— (査読付)	単	1993年9月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室)	『増鏡』に引用される先例の意味に着目し、先例とされる人物とそれに対比されて描かれる物語中の人物との相互関係を分析。『増鏡』の皇統に関わる人

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
21. 『竹むきが記』の主題意識—反復表現の検討— (査読付)	単	1992年9月	62巻9号 pp. 1-17 国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 61巻9号 pp. 1-15	物は二つの流れに位置づけられて対比的に描写されることを読み解き、その手法が『増鏡』の皇統観と不可分に結びついている点を指摘する。さらにその分析が『増鏡』作者の立場を推測する手がかりともなることも明らかにした。 光厳天皇の典侍・日野名子の日記『竹むきが記』は、上下巻を各々前半・後半とした四部分で主題が分裂すると捉える通説への見直しである。作者の夫の西園寺家について他と一線を画した表記をすること、また尊貴な人物の西園寺家への評価の言葉を書き留めること、さらに「深雪」と「御幸」を掛詞とする予祝表現、これらが反復されることを指摘。そこから自身と西園寺家の栄えを記すという主題が、全編を貫くことを読み解く。
22. 一場型修羅能の変容—禪鳳作「生田敦盛」を中心に— (査読付)	単	1988年10月	国語国文 (京都大学文学部国語学国文学研究室) 57巻10号 pp. 34-51	源平の合戦を素材にした修羅能は、典型的な二場型のみならず、一場型のものがあるが、後者の独自の性質を「生田敦盛」を中心に論じる。一場型修羅能は主題を合戦談から遠ざけ、人間同士の情愛・音楽や和歌への執着へと視点を移す方向にあり、特に世阿弥の時代以降は素材の選択が多様化することを指摘、修辭的には、和歌や漢詩の「綴れ錦」という謡曲の特性は踏襲されるものの、次第に平淡な作詞法に変化することを検証する。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 王朝歴史物語の「歴史性」と「物語性」	単	2019年8月	第34回 鳴門教育大学国語教育学会	『栄花物語』に見られる「出来事の進行時間の圧縮」「出来事の時間経緯の入れ替え」のような「物語性」のある叙述の傾向、人物の描写に見られる叙述の特性を解き明かす。中関白家の定子は『栄花物語』の中で物の怪として描かれるべき人物であるが、その身位、所生の皇子女たちの存在、そしてその皇子女が道長の子息である頼通・頼宗と姻族関係をなす歴史的事実＝「歴史性」を踏まえ、描写に相応の付度・配慮が不可分であった『栄花物語』の成立事情を検討した。
2. 鎌倉時代の王朝物語—歴史的分脈の中で—	単	2011年8月	第26回 鳴門教育大学国語教育学会	『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』などの王朝物語は、鎌倉時代にも大きな影響を与え続け、その継承作品が作られ続け「中世王朝物語」との呼称を与えられている。ただ、それらの作品が歴史的な文脈の中で捉えられることは従来稀であった。しかし「中世王朝物語」もまた歴史的背景・政治的動向・宗教的基盤などと無縁では成立し得ないという見通しの下、個々の作品をそれらが作られた時代の文脈の中に位置づけて読み直すことが豊かな物語文学史の構築に繋がることを指摘した。
3. 『増鏡』の明暗循環	単	1992年11月	平成4年度 京都大学国文学会	『増鏡』で既に論究がなされる「明暗循環」説に、作品で多用される先例の分析を加えて考察した結果を発表。所謂「大覚寺統」には負、「持明院統」には正の価値を付与し、明確に描き分けている先例から、物語の終末部は「持明院統」の再浮上を暗示していることを示した。
3. 総説				
4. 芸術 (建築模型等含む) ・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 【解説】中世王朝物語の展開と終焉	単	2010年7月	『中世王朝物語全集』第21巻・葉第11号 笠間書院 pp. 1-4	『我身にたどる姫君』は物語が作られた政治動向や社会情勢の反映があるが、新たに検索できたいくつかの徴証を指摘。この物語には、作者の創意が大いに伺われるのであるが、後継の物語には恵まれず、やがて別の物語分野の擡頭を迎えるという物語史の大筋を解説する。
2. 【翻刻】幸若舞曲研究 第7巻	共	1992年11月	三弥井書店	未刊行の京都大学付属図書館蔵の幸若舞曲集「幸若直熊本」(上)に収められている「未来記」「木曾願書」「伊吹落」「元服曾我」「腰越」「勸進帳」「夜討曾我」「八島」「敦盛」「満仲」「烏帽子折」「大職冠」「一満箱王」「静」の14曲を分担して翻刻するものである。(総頁数:501頁) 【執筆章】「八島」pp. 322-335・「静」pp. 402-412 【執筆章】藤井奈都子、小林健二、小島明子 他7名
3. 【新聞解説】金春禪鳳の作能法	単	1990年8月	京都新聞 文化欄「芸能史事始」	室町後期の能楽作者・金春禪鳳の手になる謡曲「嵐山」「一角仙人」「生田敦盛」「東方朔」「初雪」

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
				「黒川」の6曲が今日に伝わるが、その禪鳳の作能法を分析・解説した。
6. 研究費の取得状況				
1. 『栄花物語』本文の変容と再構築についての研究（研究課題番号 25370219）	単	2013年4月～2016年3月	日本学術振興会 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) 研究代表	『栄花物語』の異本系本文である富岡本（甲本・乙本）を中心に、中世において『栄花物語』本文が抜粋、あるいは増補されるという相反する状況を呈する実態を調査・考究するものであり、本文が再構築される時代的な背景・思考を闡明する。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2012年4月～現在	日本国語教育学会 会員
2. 1988年4月～現在	中古文学会 会員
3. 1988年4月～現在	中世文学会 会員
4. 1988年4月～現在	日本文学協会 会員
5. 1985年4月～現在	京都大学国文学会 会員